

# 元明の道教・民間信仰と「三教搜神大全」－特に元帥神の変容について－

## 概要

二階堂 善弘

### 前言

本論文では、元明の民間信仰を考察する場合、必ずと言ってよいほどその典拠される『三教搜神大全』について、特にその元帥神の記事に着目し、道教経典と通俗文学の資料と比較することによって、信仰の発展状況について考察する。

### 第一章『三教搜神大全』の構成

ここでは、『三教搜神大全』の成立と構成について考察する。まず三種の「搜神」系類書、すなわち『搜神広記』『三教搜神大全』『搜神記大全』の構成と内容を比較する。

『搜神広記』は、元代に出版されたものであり、明の『三教搜神大全』『搜神記大全』はほぼその記事を踏襲している。但し、その踏襲のやり方はそれぞれ異なっている。『三教搜神大全』では『搜神広記』の項目を配列もすべてそのままに取り込み、後ろに記事を增加させる形で増補を行っている。『三教搜神大全』で増加されているのは、元帥神に関するものと、多くの禅師の記事である。一方で『搜神記大全』の側では、すべての項目を配列し直し、また多くの記事を追加している。こちらでは地方神の記事などの増補が多い。『搜神広記』に無く、『三教搜神大全』と『搜神記大全』の双方に共通する記事が存在することから、恐らく『搜神広記』の後にさらに別の「搜神」系類書があったものと推察される。

『三教搜神大全』では、「聖母尊号」において、由来の全く異なる二つの神を安易に一つの項目にまとめてしまうなど、編者の教養レベルの低さを窺わせる改変が目立つ。また他の資料からの項目の採用も、かなり恣意的なところがある。これに比して、『搜神記大全』の方が編纂の方法は穏当と言ってよい。

### 第二章 元帥神について（一）－元帥と道教－

ここでは、『道法会元』や『法海遺珠』などの道教経典における元帥神の変化について検討する。

『三教搜神大全』において目立つのは元帥神の項目の増加である。元帥とは、関元帥・温元帥・趙元帥・馬元帥・殷元帥・鄧天君などの、一連の武神のことである。これらの神々は、唐代までの資料にはほとんど見られず、五代から北宋になり、雷法の発展とともに道教の神列に配されたものと考えられる。

ただ『無上九霄玉清大梵紫微玄都雷霆玉经』や『高上神霄玉清真王紫书大法』など、比較的早期の神霄派の経典には、『三教搜神大全』に見えるような元帥神が登場することは少ない。この時期の神霄派や天心派では、北極四聖や天罡大聖などが有力な神将として扱われていることが多い。『無上黄籙大斋立成儀』など、幾つかの経典にはまとまった形で元帥

神の名が見られることがあるが、この部分については明代の増補と考えられる。白玉蟾は、『海瓊白真人語録』の中で、元帥などの神将を雷法各派がかなり恣意的に増やしていることについて言及している。

一転して『道法会元』には膨大な元帥に関する記載が見られるようになる。しかし、『道法会元』の構成は複雑であり、多くの法術系統や時間を異にする資料が雑然と配置されている。その複雑な構成を、あえて大雑把に捉えるならば次のような傾向があると考えられる。

すなわち、まず「上清天蓬伏魔大法」や「混元飛捉四聖伏魔大法」などでは北極驅邪院の四聖と天罡大聖などを中心とした体系となっている。これは恐らく、天心系統の法術の古い姿を残すものと考えられる。唐・葛・周の三将や、崔・盧・鄧・竇の四将などを重視する。次に「高上神霄玉枢斬勘五雷大法」などを代表とする神霄系の法術がある。これらでは鄧・辛・張・苟・畢などの雷部の諸天君が中心となる。但し神霄系の法術は様々なバリエーションがあり、八卦洞神雷法の系統では龐・劉・陶の諸天君を、南宮火府の系統では呉・宋・劉・楊元帥を、太乙雷法系統では丘・王・孔・林・謝などの諸元帥を、金火天丁系統では張天君を重んじるなど、単純ではない。一方で九州社令系統のように、幾つかの諸天君を組み合わせる場合も多い。

また酆都系統や地祇系統では、温・関・張・趙などの諸元帥を重視する。馬靈官や王靈官、また殷元帥などもこれに近いが、やや別の系統にあると思われる。これらの元帥はどちらかという幽冥界の「鬼官」といった印象が強い。関羽や張巡など、忠義を尽くして陣亡した実在の人物が多いのも、これらの元帥神の特色である。『道法会元』の前半の多くを占める清微系統の法術では、恐らくこれらの出自を異にする天君や元帥を可能な限り取り込もうとしているようである。また清微派においては、これらの元帥神を、伝統的な三清や四御の神と並べることによって、より伝統的な枠組みへの体系化を図ろうとしているようだ。

そして『法海遺珠』と『道法会元』とを比較した場合、恐らく両者の編纂時期は近いものと思われるが、しかし明確に『法海遺珠』の方には、ある種の方向性が出ているのと感じられる。『法海遺珠』に見える神は、丘・王・宋などの諸法の元帥がある一方で、温・関・張・趙・殷・鄧・辛・張・苟・畢などの元帥が強くなる傾向があるということだ。これは後の通俗文学作品に見られるような傾向に近い。『道法会元』が「集大成」的な意味から新旧の法術を統合させているのに対し、『法海遺珠』では同じような編纂態度とはいえ、ある程度の取舍選択が行われているのではないかと推察される。

### 第三章 元帥神について (二) -通俗文学と元帥神-

元から明にかけての通俗文学作品の多くに元帥神が登場する。ここでは、『水滸伝』や『西遊記』、また『三宝太監西洋記』『封神演義』『四遊記』などの作品を取り上げ、その中に描かれる元帥神の姿について検討する。

多くの作品に共通するのは、すでに元帥が天界の代表的な神であると考えられていることである。そしてその人員は、温・関・馬・趙の四大元帥、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢の各天君、それに王靈官でほとんど占められている。中でも『北遊記』だけは例外的に多くの元帥神を入れるが、これは『三教搜神大全』に基づいているために起こった特殊な現象であると考えられる。また『封神演義』の二十四天君は、基づくところがあるとはいえ、作者が恣意的に作り出した面がある。

そして、『道法会元』などの諸経典に見られた夥しい元帥神の大半は、これらの作品群には反映されていない。しかも四大元帥を始め、元来は地祇法系統であった神、または清微系経典で重視されていた雷部の神が圧倒的に強い影響力を持っている。

もともと、元帥神の形象や故事については、道教経典とはかなり異なるものとなっている。多くの元帥神に関しては、民間において別個の説話が発展し、定着していったものと考えられる。『三教搜神大全』における元帥の記事は、その発展の途中の状態が記録されているものと推察される。

#### 第四章 各神の項目について

ここでは『三教搜神大全』の各神に関する幾つかの記事を取り上げ、その性格について考察する。

「関元帥と解州塩池故事」では、『三教搜神大全』の「義勇武安王」に見える関羽の故事について考察する。この記事は『搜神広記』のものをそのまま踏襲しているが、関羽の生前の事蹟よりも、宋代に張天師の命を受けて解州の蛟を退治したという故事の方がはるかに重視されている。この故事自体、各種資料でその描かれ方はかなり異なる。この故事は『道法会元』「地祇馘魔関元帥秘法」に見える「事実」の記載が最も古い形を残すものと考えられる。

「雷部諸天君の姓名について」では、雷部の天君として有名な鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢などの元帥が、道教経典に見られるものと通俗文学に見られるものでは、その名前や事蹟において大きな違いがあることに注目する。『道法会元』などほとんどの道教経典では、鄧・張の二天君は、その名を「鄧伯温・張元伯」とするのに、通俗文学の資料ではほとんどこの名を示さない。例えば、『西遊記』ではこの二天君の名を「鄧化・張蕃」とする。恐らくこれらの天君については、民間で独自に説話が発展したものであろう。

「殷元帥太子出身説話」では、太歳殷元帥の「殷の紂王の太子であった」という故事について分析する。同じ故事は『武王伐紂平話』にも見えているが、この故事は『道法会元』などにはほとんど反映されていない。また殷元帥の形象は、密教の明王の姿を模したものである可能性が高い。

「馬元帥華光と五頭神」においては、馬元帥・華光神と、それと混同されることの多い五頭神について考察する。馬元帥と五頭神は、それぞれ別個に『三教搜神大全』に記事が存在する。それぞれの関連性はほとんど無い。恐らくそれぞれ独自に発展した信仰であっ

たと思われる。後に幾つかの特色が、「五頭靈官華光」に集約されていったものか。

「温元帥及び十太保」では、太保と呼ばれる東嶽大帝配下の冥界神について考察する。十太保とは、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の各元帥である。その筆頭に挙げられるのは温瓊であるが、『三教搜神大全』の温元帥の記事と、『道蔵』に収録される『地祇上将温太保伝』とではその故事は全く別と言ってよいほど一致しない。これは孟元帥などもそうであり、『三教搜神大全』には民間で発展した別個の故事が収録されているものと推察される。他の十太保についても、同じような傾向が見られる。

「玄壇趙公明の記事について」では、財神として知られる趙公明について考察する。趙公明自体は六朝からの来歴を持つ神であるが、現在のような姿が形成されたのは、宋元以後のことであると思われる。『三教搜神大全』の「趙元帥」の記事は、『搜神広記』の項目をそのまま引き継いだものである。そしてこの記事は、『道法会元』「正一玄壇趙元帥秘法」に含まれる「趙元帥録」と文章がほとんど一致する。このように、『搜神広記』の記事は、道教経典との関連性が深い。しかし、『三教搜神大全』で増補された記事はそうではない。

「王靈官と薩真人の故事」では、「王靈官」と「薩真人」の二つの記事を比較する。この両者では、王靈官の性格や、その年代に相違が見られ、ある意味矛盾した記載と言える。「薩真人」の記事の方が『搜神広記』にあり、こちらが先に成立し、「王靈官」の項目が後から追加されたことは明白である。ただ、「薩真人」の記事については、『搜神広記』と『三教搜神大全』と『搜神記大全』では微妙に書き換えが行われており、それぞれの資料の性格の違いがそこから看取できる。

「清源妙道真君について」においては、二郎神として有名な清源妙道真君の記事について検討する。元明の伝承では、二郎神は趙昱という名であるのが一般的であり、この記事もその状況を反映して二郎神を趙昱とする。『道法会元』の記載からは、趙昱については、関元帥との結びつきがあったものと推察される。

「呉客三真君と祠山張大帝」では、後に信仰が衰えたと思われる葛・唐・周の三将軍と祠山張大帝について若干考察する。

「天妃に関する記事の特色」では、媽祖神の記事について検討する。『三教搜神大全』の媽祖の記事がかなり長文であるのに対し、『搜神記大全』の方は非常に短い。しかもその内容はほとんど一致しない。甚だしくは媽祖の年代すら異なる。これに類したものに「大奶夫人」の記事がある。どうも『三教搜神大全』では、福建と密接な関係を持つ神の記事に、格別の注意を払っているように思える。

## 結語

元帥神は元明の道教儀礼文書において固定された体系があり、それが後の儀礼に大きな影響を与えた一方で、民間に独自に発展した体系と、それに付随する故事があり、変容し発展していった。『三教搜神大全』には、ちょうどその変容の中間の過程が反映しており、幾つかの由来不明な元帥神も存在している。